

令和5年度 第2回磐田市総合教育会議 会議録

日 時： 令和5年7月25日(火) 午後3時30分～午後5時

会 場： 磐田市役所 西庁舎3階 特別会議室

出席者： 市長、教育長、鈴木好美委員、秋元富敏委員、大橋弘和委員、阿部麻衣子委員
(出席者6名)

事務局： 企画部長、教育部長、政策推進課長、教育総務課長、
政策推進課総合戦略グループ長、教育総務課総務グループ長、担当

傍聴者： なし

【会議次第】

1. 開 会

2. 市長あいさつ

3. 協 議 事 項

- (1) 「磐田市教育大綱」について
- (2) 令和6年度当初予算編成について

4. 閉 会

[協議の主な内容]

発言者	発言内容
市長	<p>協議事項に入ります。今回からタブレットを持ってきているのですが、ペーパーレスでいこうと話をしていまして、子供たちはGIGAスクールを進めているので、大人もそれでいこうということでタブレットを置いてあります。</p> <p>協議事項、今日は①教育大綱について②令和6年度当初予算編成についてですが、この二つの話はリンクしています。</p> <p>もう令和6年度の当初予算の話と思うかもしれませんが、予算編成方針の準備をこれから進めていきます。次年度はどういう事業をやっていくか、どんな磐田市にしていきたいか、市の職員の組織もどうするか、色々な思いをこの予算編成方針に載せていきます。次年度に向けての動き出しが8月頃から始まりますので、このタイミングで、皆さんから、いろんな意見をいただければ、予算や組織に反映しやすいということもあります。</p> <p>磐田市教育大綱に基づいて、様々な政策立案や組織づくりをしていきますが、それに基づいて、次年度どんなことをやっていきましょう、ということをして今日この7月の総合教育会議で話しておくことによって、次年度への動き出しをスムーズにしたいという思いで今日このテーマを選ばせていただきました。</p> <p>こんな組織にしていっていいよね、こんな事業をやっていいよね、こういうことが今足りてないよねということ、大綱を見ながら、皆さんからヒントをいただきたいと思います。</p> <p>教育大綱についての思いとか、今こんなことをやっているよとか、こんなふうに展開しているよということをしてシェアしてから始めていきたいと思いますので、教育長より、挨拶も含めてよろしくお願いします。</p>
教育長	<p>よろしくお願いします。7月14日に、三遠南信教育サミットにて、30分の時間いただいて、磐田のPR・報告をしてきました。</p> <p>その中でも、この教育大綱は理念であり、人間教育を進めていくために、根っこを張る、いわゆる見えるところだけじゃなくて、見えるところを育てるために、見えないところ、根っこをとにかく大切にします、とお話をさせていただきました。</p> <p>この教育大綱も、平成27年度に策定したのですが、「道しるべ」と「こども憲章」を経て教育大綱という形だったので、今までの方針を踏まえて教育大綱に落とし込んでいるというところで、整合性のあるものができたのだと思います。</p> <p>この命から志まで、当時の総合教育会議の議事録を調べたのですが、順序性があるということが分かりました。</p> <p>この命というのは絶対的価値というか、とにかく命があつての全ての教育だということ。</p> <p>誇りというのは、人間が成長していく、前に進んでいく上で、誇り、自尊感情、</p>

自信、自分の中での自分軸というか、そういったものがあって、自分が成長していけるというところで2番目にきているというような意味合いだったと思います。

最後の志が、夢、目標、希望という、個人のところだけではなくて、世のため人のために尽くせる人になってほしいという願いが込められていると理解しました。

礼節、敬愛、感謝というのが、人と人とのつながりの中で、培っていく、そのような流れがあると自分の中では認識しています。

磐田の文化(カルチャー)もあると思います。培うというのはいわゆる、耕す、カルティベート、これは、前教育委員が、色々なところでおっしゃっていたのですが、やっぱり土を肥やして根っこを広げていく、そういう文化にもつながっていく考え方だというところが、この背景にはあると自分は教えてもらいました。

もう一つ、教育大綱の「下記のとおり目指します」の次の段が、いわゆる生涯学習、縦軸、縦の系ですね、生涯にわたり社会を生き抜く力を目指していくという縦の系で、その次の段の「新時代の教育コミュニティーを形成」が、学府を核としたという、いわゆる学校・地域・家庭、横の系ですね、縦の系と横の系で、つながりを深めながら、人間教育をしていくという、そんなつくりになっているというところで、策定されたときの方の思いも含めて、報告をさせていただきました。

市長

そういう中で、これを育てていくに当たって、まさに浸透を目指します。もちろん、この言葉を浸透させることが目的ではなくて、思いを浸透させていくということが重要だと思うのですが、そのためには事業が必要で、その事業をやるために組織も必要です。

まずその事業という視点で見たときに、こんな事業を広げていったらいいのではないか、深掘りしていったらいいのではないか、また、どうしても教育委員会という学校の話題が多くなりがちですが、文化財、図書館、生涯学習的なところまで広げて、さらに地域まで広げていったときに、この事業をもっと深掘りしていったらいい、広げていったらいいよねという、皆さんから何かご意見やヒントはありませんか。

委員

今までの機会にも言わせてもらってきましたが、やはり未来授業とか、磐田市の中でもいろいろな職場で活躍されている方がいらっしゃると思います。

そういう方に、いろいろお話いただくというのも一つ、これも過去からやられていると思うのですが、さらに進化させて、という意味です。

そのほか、体験学習というところで、5・6年生は観音山に行ったりして2泊3日経験してきますが、もう少しミニチュア版でもいいので、もう少し回数を増やすとか、重要なことは自律の心と、いろんな先輩たちの活躍や苦労話、そこから失敗を重ねて成功につながっていくという、そういう実話を聞きながら、今はこういう状況にあっても将来に希望を持てるなど、そういうことが重要だと思います。

この志を培うという言葉、私大好きで、私自身はもこの志を培うでもう全てが入っているではないかというような思いがあって、先ほどの話につながって

います。以上です。

市長

今の意見とても重要ですよ。具体的な話もありましたし、志を培うにもっと力を入れたほうがいいのではないかというご意見でした。ありがとうございます。ほかの皆さんもいかがですか。

委員

私が思うのは、大綱を伝えていくにも、全国見てもそうなのですが、やっぱり先生方が足りないと言われていて、今日の午前中も現場を見に行ってきたのですけれども、人が足りなくて困っている話もありました。

新聞の一面に、心のケアが必要な先生方がいっぱいいるというのが書いてあったので、やっぱり人が足りないとどうしても1人の負担が多くなると思います。

どうしても学校の先生というと県の採用なので、市費負担のふるさと先生をもうちょっと増やしていただいて、子供たちにこの大綱を教えていったらいいかなと。

あと、磐田市では毎年大体1,500人ぐらい子供が生まれていたけど、去年は約1,000人だったと聞きました。自分も3人子供がいますが、そのとき妻と話していたのが、やっぱり磐田市って産める場所が少ないよねという話になりました。教育とは別ですが、産める場所が増えてくれるといいなというのはいろいろなお母さん方からも聞いていますので、増やせるといいなと思いました。以上です。

市長

必要だと思います。よく言われる産婦人科を選択する医師が減っている、小児科もそうですけど、小児科・産婦人科を選択する医師をどう増やしていくのかという社会的な問題ですよ。

委員

今、産みたいという話があったと思うのでその繋がり、出生数が1,500人だったのが1,000人になったという話はもちろんすごく大変なことだと思っていますが、20歳ぐらいの子たちって、産みたいと言わないです。子供が欲しいと言わない。結婚したいともあんまり言わない。やはりそこだと思います。産む場所ももちろん大事なわけけれども、産みたいと思う、子供を育てることはすばらしいことだと思うというのを、教えたいです。

それはやっぱり性教育も含めて、小・中学校で教えるべきだとすごく思っています。特に中学校で教えるべきかと私は思っています。

あと子育てをすることが苦しいと思ってしまう若い子たちがとてもたくさんいると思います。私の経験でも、もちろん苦しいことはいっぱいあったし、時間的にも、自分の思いのとおりにならないことがたくさんあるのですが、その中に、子供を通してよかったと思えることがそれよりももっとたくさんある、ということをお伝え、男の子にも女の子にも、それが分かってほしいな。

だから、産みたいと思う大人を育てるためにはやっぱり中学校のときに、子育ては楽しいよ、苦しいばかりじゃないよということ、お金ばかりかかる、

時間がない、自分の思うことができなくなる、そういう苦しいことじゃなくて、子供を通して、こんな楽しいことがありますよということを伝える、若いお母さんや若いお父さんが伝えてあげられる場があるといいかなと、とても思います。それは命を培うという意味で、とても大事なかなと思います。

そしてもう一つ、命ということで、特に障害があって生きにくい子たち、発達に困難を抱える子たちが、地域の中で生きていける、仲間だということを分かってほしいなというふうにごく思っています。

発達にちょっと遅れのある、でも、磐田で育った子たちって、それなりに交流があるので仲間として、あいついいところあるよ、こういうところできるよ、こういうところは得意だよねと、認めてあげられることもできると思います。そこはやっぱりすごく大事なことで、そのあとその子たちも地域で生きていかなければいけないので、そこを友達、同じ仲間だよということを教えていくことがとても大事なことだなと思っています。以上です。

市長

ありがとうございます。

委員

私は、あすなろなどに関わっていて、不登校の子たちと調理実習などをする中で、先日、私は参加できなかったのですが、流しそうめんをやって、拒食症の子も、そうめんはとてもおいしく食べられたっていうのもあり、学校へ行けていない子、行かないと判断した子も、いろんな体験活動をその子たちの状況に応じた中でやっぱり開催してあげてほしいなと。

体験活動は子供たちがすごく自由に自分の思い思いに参加できているなというのを目の当たりにしていて、家では料理ができない子、させてもらえない子、する気もない子でもあすなろに来ると、例えば、せっせと包丁を持ってやると言う、ちょっと環境を整えてあげるだけで、彼女、彼らたちの経験も増えて、興味も増えて、交流も増えるのだなというのを思うと、もうちょっと不登校支援に関して、提供してあげられたらいいのではないかなと。そこに、お互い、不登校の子同士の会話が生まれ、お互いに感謝し合える。

あと、あすなろとかに行っていて思うのは、小中義務教育を終えて、高校に、もしくは社会に出た子、でも結局社会に適応しきれずに、学校に行ききれずに、高校生世代や20歳世代でも、あすなろに来ている子がいます。そういう子たちは慣れ親しんでいるからあすなろに来るのでしょう。人を頼って来るとは思うのですが、何かその義務教育を過ぎた子たちの行き場が、私はぱっと思いつかなかったもので、そうか、そういう子たちもやっぱりそこが懐かしくて、もしくはそこが行きやすく、その先生たちがよくて、あすなろに行くのだなと思いました。次の居場所が見つけれない。あすなろの次というのを考えて、ただ、不登校の子たちは本当に多種多様な問題、生きづらさを抱えているので、支援員さんたちがいても、対応しきれないところが多々あって、1人のスタッフが3役、4役やって子供たちと向き合う、子供たちはやっぱり構ってほしい、だからやはりもうちょっと、人が増えればなと。手厚くとは言わなくても、どうしても不登校の子たち

が増えている中で、向き合える誰かがいたらいいのではないかなと思っています。以上です。

市長 いくつかテーマをいただいたので、整理しながら、皆さんとディスカッションしていきたいなと思います。

まずは、体験学習とか未来授業とか、子供の成長をぐんと引き伸ばしてあげるところだと思うので、何かそのことについてもう少し皆さんから御意見いただけるとありがたいなと思います。

委員 今、未来授業って何年生を対象に行っていますか？

教育長 中2が多いですよ。小学校は〇〇先輩と銘打ってやっているところ、中学でも中1でやっているところもあり、学校それぞれですね。

市長 やってないところもありますか？

教育長 小人数に対して1人の講師というのは、小学校はまだそんなにやってないです。1人の講師に来ていただいて、みんな学級で聞くとかというのが多いかな。

委員 岩田小で1度見学させてもらったのですが、いろんな職種の方が4人ぐらい来られていて、子供たちが20人ぐらいずつ回っていくというやり方でした。

委員 コミュニティスクールコーディネーターの方たちが本当にいろんな地域の方を探してくださっています。

教育長 やり方とか、頻度、それこそ学府の中でどういうふうにつなげていくかというところは、まだ検討段階です。

市長 先輩の話聞くという事業は私たちの子供の頃にはあまりなかったですよ。今はほとんどやっているということですよ。

教育長 そうですね、職業講話も含めると、たぶん全てでやっていると思います。

市長 中2がいいのか、中2だけでいいのか、広げていく必要があるのか。

教育長 それと探求的な学びと結びつけたいなと思っていて、今構想しているのは、体験というか、その地域へ出て、やっぱり探求的な学びを充実させたい。

今、中2での実施が多いので、職業体験とか、未来授業とかを組合せながら、探求的な学びとうまくサイクルを回していけるといいなというのは考えています。

市長	初歩的な話ですけど、STEAM教育と探求教育って何が違うのですか？
教育長	STEAM教育というのは科学とか数学とかという、いわゆる、コンピューター社会の中で、どうしてもそういう人材が不足しているので、そこを小学校・中学校時代、手厚くしていきましょうという内容ですよ。
市長	芸術も入っていますよね？
教育長	アートも入っていますね。芸術的な思考、考え方、その創造性というところを重視した教育にスポットを当てていくのがSTEAM教育になっていますね。探求はもっとSTEAMだけじゃなくて、地域学習とか、もっと幅広いテーマでやっていく。だから、探求の中の分野を絞ったというのが、STEAMかなと思います。
市長	探求というキーワードで、今年度予算も初めて探求という言葉割と真ん中に置いて、ぐっと進めています、その辺の話は先生たちとも一緒に進めています。
委員	<p>全ての先生たちにちゃんと分かってほしいという教育長の思いがあって、研修に國學院大學・田村学教授を呼ばれたのかなと私は感じました。</p> <p>どのように課題を設定しても、最終的には先生の技量だということを田村教授はおっしゃったのです。先生がどのように子供に投げかけるか、先生の技量が問われる、先生がどれだけ研修しているか、子供の実態を知っているかということ。結局は、先生がレベルアップしないといけない、そういうことを言ってくださる講師ってなかなかいらっしゃらなくて、探求的な学びは子供たちが自分たちでやりなさい、だから先生がいらないのではなくて、先生がどのように提示して、どのように、次につなげていくかということは、先生の技量によるというお話があって、先生自身も研修しなくてはならないよということを伝えていただいた。</p>
市長	今すごいいいヒントが出てきて、先生の教育というのは、そもそも夏休み期間中しかできないのかもしれないですが、先ほどの未来授業をやるにあたって、コンセプトは全く現場に任せているのか、それとも多少なりともメッセージを教育委員会として伝えて、コーディネートしながらつくってもらっているのか、事前に研修しているのかというのは教育長どうなのでしょう。
教育長	まだそういう方針まではおろしていませんが、探求という枠組みの中で、そこがうまく子供たちが課題意識を持って、子供たちが調べてみたい、とつなげていきたい思いはあります。
市長	先生の学びの時間というのは、例えば、予算があればもっといい講師を呼ぶ、研修の機会が増える、そうすることによって先生を育成する、結果的に子供たち

に対して探求とか志というキーワードで、もっと深く教えることができるのであれば、先生の教育予算をつける必要もあるかと思います。先生を研修するカリキュラムをつくる人を教育委員会の中に担当として置くこともできるのではないかなと思うのですけど。

委員

先生の教育ってすごく大事なかなと思っています。

今、若い先生が多くなってきていて、やっぱりその深さであるとか、体験学習や地域に対する思いというのが、やっぱり若い先生ってそんなにない感じがする。やっぱり年齢を重ねるにつれてやっぱり地域に対する思い、そういうことが深くなっていくのは当たり前だと思うのですけど、それをやっぱり意識づけて先生たちが研修する時間が持てるというのは大切かなと。

委員

先生の熱量に違いはあると思っていて、私の農場に社会科見学で子供たちを連れてくる前に先生だけで勉強しに来るような熱心な先生もいる。そういうクラスはやっぱり子供たちもすごい活気があって、1時間ぐらい見学したあと、いろいろ質問とかもあるのですけど、やっぱり子供たちも活発です。

市長

コミュニティースクールディレクターがそれぞれ学府ごとにいるし、ふるさと先生も学区ごとにもいるから、市費負担の先生たちを、キャリア教育で権威のある講師に研修してもらおうとか、コーチングしてもらおうというやり方はあるような気がします。

教育長

國學院大學・田村学教授は探求、総合学習の第一人者なので、来年再来年の予約を取ろうと思ったけどもう全部埋まっているぐらいの人です。もう今までの学校のカリキュラムじゃ駄目ですよということをはっきり言ってくれているので、校長たちは本当に何とかしなくちゃいけないって思ったと思う。

市長

そこですよ。だから、その次の背中をもう一歩押してくれる人をあてがわないといけない。

教育長

動き出そうとしているので、背中を押す、伴走をしてあげることが必要。今、研究会を立ち上げ始めていて、その具体を詰めていくのですけど、どう伴走していくのか、どう背中を押していくのか。カリキュラムをつくるのは学校ですので、今あるカリキュラムに探求をどう組み込むかとかという視点を、どういう視点でやるといいかというのを田村教授からアドバイスをもらっているのです、そのメッセージを落としこんでいきたいと思っています。

市長

先生をしっかり支えていくための研修とか、熱量を上げるというか、先生のモチベーションを上げて視野を広げていくためのことをやらないと、子供に志、志とこの会議で言うだけでなく、現場にいる先生が伝えてくれないと

のだから、その先生たちの志がなければいけないわけで、その先生たちの志を
探求という視点から向上していけるような、仕組み、座組みを、引き続き研究を
してもらおうのが、いい方向性なのかなというふうに思います。

私のアイデアで、今できるだけ自分の子供と図書館に行くようにしているの
ですが、本に触れる時間をもっともっとつくってもらいたいと思っていて、特に、
偉人の話をもっと読んでほしいなと思っています。特に磐田はたくさん偉人が
いる。磐田の偉人にこだわる必要は全くないですが、偉人の話はいい言葉が
書いてあるので、いい言葉に触れるということに慣れていってもらおうとポジティブ
マインドになっていくはずだと思うのです。

委員 例えは竜洋図書館だと偉人の漫画の本がいっぱいある。あそこは漫画も貸し
てくれるのだけど、他の図書館も学習漫画がもうちょっと見えるところにあつたら
いいのと思う。もちろん絵本のほうがいいのかもしれないけれども、やっぱり
漫画から興味を持つ子もいる。

市長 小学校の図書館に漫画は配架されていますか？

委員 学習漫画はありますよ。
歴史とかは本の前に漫画でイメージを持つってことも重要。絵本でもいい。
読み聞かせなどでは、竹取物語の絵本を中学生に読み聞かせる、そうしたら
だいたい内容がわかる、イメージできる。

市長 それもいいですね。
私にこっ頃から、子供の頃読んだ本を紹介してほしいと言われたときは、
歴史漫画と回答しました。

委員 またそれを大人になって読むと、隅々まで読むから、すごいよく分かるじゃない
ですか。子供の頃も読んでいたと思いますが、大人になってまた歴史漫画を読む
と、こんなところにちゃんと書いてあったと気づくと思うので。

市長 本の出し方や見せ方をちょっとした工夫したほうがいいのかも。もちろん、それぞれの図書館ごとにコンセプトを持ってやっているの
で、その
こだわりまでひっくり返す必要はないと思いますが。
後は、不登校の子の話が先程出ましたけど、あすなろにも歴史漫画などは
置いてあるかなって気になりました。

委員 少ないです。絵本なども置いてありますが、少ないです。たぶん寄付でのいた
だきものだと思います。

市長 寄付でいただくのも手法のひとつですね。クラウドファンディングや地元企業

	<p>に、〇〇文庫として、〇〇さん寄贈のように掲載すれば、思いのある地元の人たちはやっていただけるかもしれない。</p> <p>偉人の本、漫画は参考にさせていただきます。いい言葉に触れるっていうこと、いい生き方に触れるっていう意味でも、厳選されていますのでね。</p> <p>続いて、子育ての話の中で、性教育というキーワードが出ていたと思いますが、教育長、現状と課題は？</p>
教育長	<p>いわゆる学習指導要領上の性教育はもちろん、全国津々浦々やっているのですが、市内の学校でも、思春期講座というのがあります。どの学年も、親子で学ぶ場や、ずばり性教育のカリキュラムもあって、そこはきちんと教えています。年2回、3回やっている学校、学年もあります。</p>
市長	<p>そもそも、学校でどこまで教えるべきなのかということに対して、皆さんの意見を聞いておきたいです。</p>
委員	<p>以前、幼稚園に関わったときに、幼稚園の時からそういう教育をやるといいよと絵本出版社の人と話をしたことがあります。</p> <p>赤ちゃんはこうして生まれるという絵本があるのですが、今一緒に住んでいないかもしれないけど、あなたには必ずパパとママがいて、パパとママが愛しあったからできた子なのだよという、結構具体的な絵もあるような絵本を、幼稚園の時から読んでいけば、大切なメッセージを伝えることができる。</p>
市長	<p>やっぱり助産師会にお願いしないと、こういう話はどうもできないかなと思うんですけど。</p>
教育長	<p>磐田第一中学校でやっていたような、性教育の話と、赤ちゃんと保護者が実際に学校に来てくれて、子育ての話聞いて、子供の笑顔を見て、子供がほっとして、子供って良いなみたいな関係性を持つというプログラム(赤ちゃん広場)はいいなと思います。</p>
委員	<p>赤ちゃん広場はとってもいいと思います。その赤ちゃんは、地域にいる赤ちゃんとお母さんに来てもらっていて。あれはとってもいい。赤ちゃんを抱っこしたことのない子もいっぱいいるので。</p>
政策推進課長	<p>お母さんと赤ちゃんを集めていたのは、こども未来課の地区担当保健師で、保健師はもっとやりたがっていたけど、なかなかやってくれる学校が広がっていかなかった。やっぱり学校からすると、ハードルが高いのかな、こっちは広めなかったけど、需要と供給の関係がうまくマッチしなかった。</p>
市長	<p>そういった視点で見たときに、性教育という話と、赤ちゃんに触れること。</p>

	<p>まさに先程おっしゃっていた子育てが大変だということも、赤ちゃんを抱っこしたら、わー可愛ってなることに期待をしながら、子供と赤ちゃんと中学生を関わらせるというのはすごくいいかもしれないと思いますが、教育長、やろうと思うと難しいですかやっぱり。</p>
教育長	<p>新たな時間を生み出さなくてはけないので、探求のカリキュラムの改善と同じく、学校のカリキュラムの見直しという部分で、それやるのだったら何かをやめるという学校の作業が必要になります。</p>
政策推進課長	<p>赤ちゃんを集めるのも大変ですが、やっぱりやりたいという思いがあっても、学校側の対応のほうやっぱり今、教育長がおっしゃったとおりでと思いますが、難しいですね。やる時間がないからと。赤ちゃんも減ってきています。</p> <p>でも今、保健師の体制も充実して、寄り添い型になっているので、関係ができていけば声もかけやすいと思うので、少しずつ進歩しているかもしれないですが。</p>
教育長	<p>お母さんが子供を産んだときの苦しみとか、そのあとの子育ての楽しみって話を直に聞いてほしい。</p>
委員	<p>そう思います。この子のときはこうだった、あの子のときはこうだったってあるじゃないですか。大変だけどこうだったよという。だからこそ親子と触れ合う機会があるとよいと思う。</p>
市長	<p>これは次年度に向けて検討していきましょう。</p>
教育長	<p>運営の課題は、コロナで2・3年間実施できていなかったから、その時の担当者がいないので、誰もやり方を知らない。</p>
市長	<p>コミュニティースクールディレクターや民生委員・児童委員の力も借りていきたいですね。</p>
教育長	<p>この取組を学校に投げかけていくのは私も大賛成です。</p>
市長	<p>学ぶための動機づけという意味でも、学校にとってもプラスになるはずなので。そういう視点でぜひ取り組んでもらえるとありがたいなと思いますね。</p> <p>続いて、不登校の関係ですね。不登校の子たちの学びの場の整備、皆さんどうですか。</p>
委員	<p>その子たちが、自立すること、何か職業につくこと。そこを目標に、そこに最終的にはつなげたいです。自分たちで生きていく、自分たちでお金を稼いで自分たち</p>

で生活できる。親が先に死んでしまうのだよ、そのときに自分たちが、生きていけるということを目指してほしい。

心理的安全性とよく言いますが、心理的に安全な場所が親との間にあればいいのだけど、それがいない子たちが意外に多くて、それを支援員の方に求めてしまうので、支援員の方たちも大変になっている。本当は支援員じゃなくたって誰だっていいですよ、親じゃなくても、教師でもいいし、地域の誰かでもいいし、誰かと信頼関係があれば、安心して外に出ていけるのだらうと。そこが目標ですよ。現状、支援員にその関係性を求めているので、人員の増員が必要かと思えます。

委員 位置づける的に地域の方々って入りにくいですよ。

市長 仕組みだと思えます。登録は必要かもしれませんが、もっともっとハードル低く入れる仕組み。

誰にもきちんと役割がある地域にしていきたいという思いがあって、高齢者にもあなたが活躍する場所はここなのだというのが一人一人にある磐田にしていきたくて、それって高齢者支援でもあるわけです。子供たちを支援しているつもりが、自分たちが支援されていたみたいな話になると思うので、これ仕組みだと思うのですが、学校そのものにはやっぱり入りにくいものですかね。

教育長 とにかくそのハードルを下げたい。先日、ながふじ学府に行ってきたような話をしてきましたが、その仕組みというか、地域にも学校にいつ来てもいいですよというメッセージをどのように出していくか。学校というのは用事がない限り行っちゃいけないみたいな意識がどうしても高いので。

委員 教育支援なんかを回覧版で登録の依頼をしてもなかなか広まらないしハードルも高いと思う。お客さんとして行くのは行きやすいと思うのですが。

委員 年配の方というのはやっぱりそれなりにプライドを持って仕事をしてきて、それで今家にいるようになって、地域で生活していると思うのですが、やっぱり何か人の役に立つことじゃなかったら入りにくいと思えますよね。

市長 自分じゃなきゃできないこと、というのを求めていますよね。ちょっとスキルがないとできないことをお願いしたほうが、みんなやる気になりますよね。

教育長 そこがコーディネーター、ディレクターが声かけて来てくれるといいのだけど。
ながふじ学府は地域連携室があるので、コーヒーを置いておくとか、いつでも来ていい雰囲気にして、どんどん地域の人に来て、子供とも関わるとか、ある意味、寄り合い所みたいな感じをイメージしている。
そういうハードルを下げるような投げかけ、あとは仕組みづくりが必要。あと、

学校運営協議会でどうしたらいいとかっていう共有するなど、とにかく手を変え、品を変えやって、敷居をどう下げるかというところ。

各学校ではボランティアに来てもらうのはやっぱり必要だから、お願いしますという声かけは継続的に続けていくしかないと思うのですが、不登校の子への関わりとかっていうと、どう関わっていいとか、そういうところになるとやっぱり不安になってしまうことはあると思います。

委員 地域の人が、不登校の子に関わるというのは難しいですね。

委員 そもそも不登校の子は、同年代の子と関わることすら難しい。逆に言うと、大人だから大丈夫という場合も多々あるのだけど、やっぱり知らない人というのに対しては一步距離を置く、でもそれを取り払って、知らない人じゃなくなったときに、安心できる大人が増えていくのだけど、そう簡単なものでもない気がする。

委員 学校に行けるのが普通でしょみたいな価値観を押しつけられたら、もうすごい拒否反応を示すこともる。

教育長 さっきの流しそうめんもそうかもしれないし、料理などを一緒にやれば、きっとその中で会話が生まれて、自然な関りができると思うけど、何も無いところに行くと、何かすると言っても共通の話題もないし、ゲームやるって言っても、この人誰って話になってしまいます。そこの第一歩を超える、何か作戦が欲しいのだと思います。

委員 繊細で、最初の一步が難しい子たちが多いので、もちろん企画をしても、大人しか参加者がいないみたいなこともあるが、そういう体験の中で一人でも二人でも何かきっかけをつかんでくれたらいい。

市長 大人もそうかもしれないですね。子供だと、今日は合わないけど明日は気の合う子と出会えるとか、今日のゲームは嫌だけどこのゲームならやれるなどかがあるかもしれないから、あすなろやあすなろ2、何かゲーム大会みたいなのをやってみるのも良いかもしれない。

委員 この間、eスポーツをやっていましたね。楽しんでいましたね。

市長 中学を卒業した後の居場所の話がありました。

委員 20歳ぐらいの子もあすなろに来ていたのを見て、行きたいところになっているのかと。

市長 社会的にユースセンターと呼ばれる場所で、こども・若者相談センターの

ジャンルでやっていく部分で、設置している自治体はあります。若者や高校生の居場所づくり、それについて私はありじゃないかなと思っています。

委員 そこから福祉就労につながる？

市長 そうではなくて、本当に誰でも来られる。部活動に入っていない子たちが音楽やったり、卓球やったり、そういうフリーな場所というか、サードプレイス。第3の居場所みたいな形でユースセンターを設けているところは、全国でもあります。数年前のトレンドですね。誰がいてもいい居場所づくり、そういうのはありなのかなというのは思います。

委員 市長が考える誰でも行っていい場所って、職員さんはいるのですか。

市長 いるけど、何も言わないというのは、おおよそ全国のトレンド。使う時間なども自分たちでルールも決めている。私もそういうイメージを持っています。ユースセンターというと、大人があんまり介入しない。

委員 誰でも行っていいから、大人も行っていい？

市長 そういわけではないようにしていると思います。18歳以下や、20歳未満にしているのではないかな。

委員 20歳になっても信頼できる人がいるから、あすなろに来るといことですよ。大人になってからではなく、やっぱり子供のときから人とつながることの心理的な安全、信頼できる大人がいるということが必要ですね。

委員 もう1回だけ、体験学習の話させていただきます。

コロナ前に、バレーボールスポーツ少年団の子たちを集めて、年に1、2回春野で宿泊合宿をやっていました。体育館でバレーの練習をやって、そこから自分で薪割りを始めて、それをまた細かく刻んで、釜戸に火をつけて、火をつけるのもマッチで新聞に移して、それを薪に移してと。御飯も自分で研いで、炊かせて、みそ汁とカレーライス、翌日の朝も同じように御飯とみそ汁とウィンナー焼くなど、そういうことを親の手を一切借りずに100人くらいでやっていました。子供たち一生懸命やるのですよ。ちょっと危なっかしい子も当然いますけど、でもけがをさせることはまずない。

そういう中で、じゃ炊飯器で御飯はどう炊けているのかなんて、みんな分からないですよ。火はこういうふうについて、御飯が炊けるタイミングっていうのはこういうことで、煮立って炊けていくのだよ、蒸らさないといけないのだよと。そういう原理原則のところ、そういうところって実際にやってみるとものすごく楽しい、大変だけど楽しい。

洗濯だって洗濯機があるわけじゃないので、自分で洗剤つけて、洗って、絞って、干して、どのぐらいで乾くか。家の洗濯機って、スイッチ押せばできてしまう。だから、あまりにも恵まれすぎちゃっているということを自覚して、そこをもう一度、昔の人たちが苦勞していたことなどを体験させることが、すごく大事じゃないかと思っています。小学校3年、4年生だったら十分できると思うので、市内でもそういう経験ができるようなところがあれば。

スポーツ少年団を卒団して、中学も高校になってもやっぱりその話になるのですよ、あれは楽しかったねって。毎回それで中学・高校生になっても来てくれる。自分で何か体験をしながら、過ごす時間ってというのは大切じゃないかなと思うので、そういうことをたくさん経験していると、何かつまずいたときでも、きっと何とかなる、そういうふうに見えるのではないかなと。

市長 体験をする場もないし、引率する大人もいなくなりつつありますよね。また学校にそれを求めると、日程的にも苦しいでしょうし。

委員 去年、高校生の企画提案発表の中で、高校生が企画する防災と絡めて、学校に泊まろう、キャンプのような話がありました。

市長 防災キャンプをやっているところは、コロナ前は結構ありましたね。宿泊の防災訓練を各地域づくりでやってくれというオーダーを出していたので、子供と一緒にやるのはいいかもしれないですね。

委員 地域の人にやってもらうのがいい。地域の大人を知る、地域の大人の顔を知る機会になる。

市長 何か仕掛けをして地域づくり協議会にお願いして、モデル地区をつくってやるのはありかもしれないですね。防災教育みたいところで、命でもいいかもしれないですね。防災キャンプと絡めて、飯盒体験とか。

残りの時間が少ないですが、ご意見をたくさん出していただいて、具体的にどうやったらできるのか、どうやったらそれができる組織になるのかということ、今、企画部と教育委員会事務局も聞いてくれているので、これをまず言葉にして、形にしていくということが必要だと思うので整理をしながら、この教育大綱にのっとして、現場に反映できるようにしていきたいなと思います。教育長、何かありますか。

教育長 こうなるといいなという意見をたくさんいただけたので、やっぱり人づくりというところがベースになってくると思います。

市長 小さな改善から大きな改善まで、意見をいただきありがとうございました。最後にこれだけは言っておきたいなということはありませんか。

委員	教育大綱を始め「道しるべ」や「こども憲章」とか、振り返るためにホームページを見ましたが、教育大綱は教育委員会のトップページに入れておいたほうがいいですね、常に目に触れるところに。
教育長	教育委員会事務局で対応します。
市長	何が大事かという、教育大綱は教育委員会だけで決めているわけではなくて、市長部局も関わって決めているというところで、所管関係なくいきたいなど、強く思います。子供たちに所管は関係ない、縦割りではないので。やっぱり一人一人の子供たちをきちんと見ていけば、縦割りを越えていかなきゃいけないと思っていますので、今みたいな意見もすごく大事だなというふうに思います。ホームページのトップページに出すなどはすぐできると思いますし、それをどう見せていくかというのは、プロモーションという意味でお願いしたいと思います。
委員	磐田市のSNSに小中学生の掲載が少ないなと思いました。制限が多いのか、話題になりにくいのかなど。
市長	プレスリリースの仕方も幼稚園保育園課と教育委員会で違うのではないかなと思います。教育委員会は各学校でやらなければいけない。だから、一校一校がきちんとプレスリリースできているかというところとわからない。
委員	学校のホームページを見れば、その学校の行事などは見られると思います。例えば、卒業した子たちが磐田市SNSを見た時に、小学生とか中学生の話題あまりないなって。
市長	プレスリリースがあるから、幼稚園保育園は広報広聴・シティプロモーション課で取材に行きますが、学校へ取材に行く事ってあまりないですね。
教育部長	学校として、自分たちの関係者だけが分かればいい、保護者が分かればいい、保護者には通知も出しているし、ホームページもやっている、説明責任を果たしているというのが学校の考え方で、それがいいかどうかはまた別として、磐田市のプロモーションという考え方ではない。
教育長	大体学校は常の行事はプレスリリースせずに、例えば150周年記念など特別なイベントや行事だけリリースしている。
企画部長	以前は、「うちの学校の取材をしてくれるように記者に頼んでくれ」とか、学校の先生から言われたことはありました。確かに最近、新聞で取り上げられる機会も減りました。

教育長

PRの場としては、新聞に掲載されるのが一番良いので。

市長

校長会などで少し意識していただくように伝えていただければ。
それでは時間になりましたので、協議事項についてはこれにて終了したいと思います。
進行を事務局に返します。

事務局

ありがとうございました。次回第3回の開催は、12月を予定しており、定例教育委員会とは別の日で設定をしたいと思っておりますので、日程の調整できましたら、御連絡いたします。では以上で令和5年度第2回の総合教育会議を閉会いたします。本日はありがとうございました。